

学会の顔“論文集”を会員皆のものに

伊藤 学



しばらく前からほとんどの工学関連学会において論文集の見直しははかれ、いろいろな工夫がこらされるようになった。わが土木学会もその例外ではなく、学会誌を含めた定期刊行物検討委員会が設けられ、私とその取りまとめを

仰せつかった。その結果、各委員の熱心な審議によって実現したのが、部門ごとの分冊化、研究（技術）展望・招待論文などを加えた編集努力、そしてこの第VI部門の新設であった。第VI部門に限らず、工学の論文なるものは、大学や研究所の人達の理論や実験を内容とするものばかりでなく、もっと多様であるべきだと私は思う。事実、すぐれた土木技術の成果は在来の学会論文集への寄稿者以外の人びとの手に成るものが多く、それらの成果が獨創性ある技術開発、ユニークな手法に基づくものであることはいうまでもないからである。それらの人びとが学問に縁がないと称し、論文集に関心を示さないとしたら、工学の学会としては真に奇異といわざるを得ない。

前述の背景のもとに誕生した第VI部門論文集の編集にあたられてきた初代小委員長の故湯田坂益利氏（私どもの検討委員会の委員でもあられた）をはじめとする歴代委員各位のご苦勞には深い敬意を表したい。その跡はこれまで4号の編集に歴然と現われている。しかし、この新しい試みを軌道に乗せるために、生みの親の一人と自認している私としては、この機会に一つ注文を呈したい。それは、学会誌との性格分けをここで明確にすべきではないかということである。すなわち、学会誌に以前から投稿され、掲載されてきた記事のうち、計画・設計・施工それに技術開発の報告は、それが獨創的かつ専門的内容であれば立派な論文なのであるから論文集に回していただき、逆に、座談会・ニュース・寄書などは会員への啓蒙、コミュニケーションを目的としたものとして学会誌が扱う方がよいのではないかと考える。それにはまず、この第VI部門論文集に多くの論文を積極的に投稿していただくことが必要である。日本の土木技術がこれだけ世界に冠たる業績をあげているからには、編集委員会が悲鳴をあげるほどの寄稿があつておかしくないと思うが、現実にはなかなか難しい事情もあるようである。たとえば、発注者と受注者の関係、大多数の技術者の学

会に対する認識などである。しかしこれらの点についても、土木界の近代化をめざした意識の変革を望みたい。学会は学者だけのものでも、役所とか会社といった組織のものでもなく、Society of Civil “Engineers”なのである。その顔である論文集に掲載される成果こそ、最も高い評価を受けるという認識をもっていたらいいと思う（英文論文も歓迎している）。

（筆者・Manabu ITO, 東京大学教授 工学部土木工学科）

3年目を迎えた第VI部門論文集に望む

岩崎 訓明



私は過去に2度、昭和43、44年度と54、55年度に論文集編集委員会に籍を置いたことがある。特に最初のときは論文集が論文報告集に改称された時期（第161号、1969年1月）に当たっていた。このときの改訂は、論文という名称にとらわれて原稿の傾向が一方に偏するきらいがあり、会員が土木工学に関して行った研究の成果を互いに交換して専門學術および技術の進歩と相互の利益に役立たせる、という目的が十分に達成されていないのでこれを是正しようとするものであった。この改革により学問技術に役立つ研究、調査、工事報告に関する論文、資料などを広く、かつ積極的に掲載し、英訳名も Transactions から Proceedings に改められることとなった。

一方において、論文集は土木学会の顔であつて、わが国の土木界の最高水準の論文のみが掲載に値する、とする意見もあるが、きわめて専門の近い一握りの研究者にしか読まれない難解な論文ばかりが載っていて、一般の会員には無縁に近いのでは、全会員のものであるべき学会の刊行物の本来の目的から遠く外れていると思われる。

編集委員会その他の組織において、その後も絶えず論文集のあり方についての検討がなされてきたが、今回の第VI部門の創設は、この流れを大きく前進させたものといえる。

雑誌や新聞のイメージや評価は、刊行の趣旨などを読んでもなかなか明確にはならないものであつて、それらを購読している間に自然に固まってくるものであろう。その意味において、既刊4冊は第VI部門論文集の今後の方向を定めるもので、編集ならびに執筆に携わった人々

の努力と苦労は大変なものであったと推察される。これらを通覧すると、記事の区分がⅠ～Ⅴ部門の論文集に比較してかなり多くなっている、学会誌との区別がつきにくいところもないとはいえないが、Ⅵ部門の読者層とみられる会員の人数と職種の高さを考えればむしろ当然かもしれない。しかし、創刊当初と同程度の編集努力を継続させることは容易ではないし、そうでなくても論文集は編集委員会の意図したものから会員のものへと成長すべきであると思われるので、今後は一般会員からの投稿の増加を図る必要があろう。それには、論文集と会誌の大きな相違が問題を深く掘り下げるといふ点にあることを強調したうえで、投稿原稿の区分を、たとえば論文、工事報告、技術報告、資料、などのように明快にして原稿をまとめやすくするのも一案ではないかと考える。

(筆者・Noriaki IWASAKI, 東洋大学教授 工学部土木工学科)

しい論文集である必要はない。

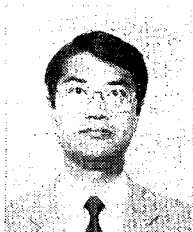
このような観点から、土木施工研究委員会の活動報告は意義深く読ませて頂いた。特に、建設業に研究機関の委員を含めた活動から何が生まれるかということに、大きな期待をもっている。さらに今後、誌上で多くの立場の人々が議論するためには、問題提起というか質問のようなものを載せてもよいと思う。そして、その解答となるような論文が出るようならば大成功である。もう1つ、論文集への貢献に対して、土木関係の資格審査などに考慮するというのは行き過ぎであろうか。

いずれにしても、4号の段階ですでに互に関連性のある論文も掲載され、この分野の知識・技術の集積が始まっているのを感じる。

(筆者・Masahiko ISOBE, 横浜国立大学助教授
工学部建設学科)

論文集らしからぬ論文集

磯部 雅彦



第Ⅵ部門の論文集もすでに4号まで発行され、総頁数にして623頁にもなった。この機会に目次を並べて見ると、論文集なのか学会誌なのか一見区別がしにくいような内容となっているというのが第一印象である。展望・解説あり、対談あり、さらにはこのような「つうしんらん」ありで、私の専門である第Ⅱ部門などと比べると、相当型破りな論文集といえるだろう。しかし、だからこそ私でも読んでみようという気になるのだから、第Ⅵ部門小委員会の創意・工夫が当たっているわけである。特に、招待論文や展望などで、それぞれの分野の歴史・現状を知ることができるのはまことに有難い。

最近、随分世の中が理屈っぽくなり、研究・調査・計画・設計・施工の一貫性が強く求められるようになったようである。このためには、それぞれの分野の人々の知識・興味の対象が、立体航空写真の場合のようにオーバーラップする必要がある。そこで、第Ⅴ部門までのいわば部分品と設計・施工という完成品とを結びつけるための橋渡しの役割を担うのが第Ⅵ部門であろう。したがって、いわゆる学問的研究と現場での実務とが触れ合う場となるのが理想であり、このためには必ずしも論文集ら

第Ⅵ部門論文集への期待

魚本 健人



第Ⅵ部門の論文集が発刊されてから、もうすでに2年が経過し、4冊が出版されている。最初は論文も招待論文が多かったが、投稿論文も徐々に増えており、私も論文編集委員会の一員として、喜ばしく思うと同時に担当委員諸氏の努力が実りつつあるものと考えている。

第Ⅵ部門の論文集は、従来の部門だけでは対処しきれないような境界領域の問題や、新たな学術研究問題を主に取り扱うことになっており、今後行われる新たな研究部門を一手に引き受ける重要な部門である。今日、大きなプロジェクトとして行われている多くの土木工事等では、土木、機械、電気等のハードウェアから、計測、評価、解析等のソフトウェアに至るまで、幅広い情報と各分野を結合させる技術・知識が必要とされる。第Ⅵ部門の論文集は、このような場合に得られる技術・研究結果を報告する場の1つであるといえよう。

第Ⅵ部門に関する技術・研究を論文として発表する場合に大きな問題となる点は、その内容の多くが、関係者にとって最新のノウハウに属するものが多く、また、他の部門に比べ実証するに足るだけのデータ等を提示しにくいこと等であろう。前者については、特に公共性の高